18th

新響

新交響楽協会

新交響楽団

第18回定期演奏会



THE NEW SYMPHONY ORCHESTRA

18 th Subscription Concert

指　　揮　芥川也寸志
Conductor　YASUSI AKUTAGAWA

ピアノ独奏　岡村梨影
Piano Solo　RIE OKAMURA

楽新協交会響

新交響楽団第18回定期演奏会

I　シンフォニア　変ロ長調……J. C. バッハ
Symphonia Bb-major……J. C. Bach

1　アレグロ　アッサイ
Allegro assai

2　アンダンテ
Andante

3　プレスト
Presto

II　ピアノ協奏曲第1番　ハ長調　作品15……L. V. ベートーヴェン
Piano Concerto No. 1 C-major op. 15……L. V. Beethoven

1　アレグロ　コン　ブリオ
Allegro con brio

2　ラルゴ
Largo

3　ロンド　アレグロ
Rondo Allegro

III　交響曲　第5番　作品47……D. ショスタコーヴィッチ
Symphony No. 5 op. 47……D. Shostakovich

1　モデラート
Moderato

2　アレグレット
Allegretto

3　ラルゴ
Largo

4　アレグロ・ノン・トロッポ
Allegro non troppo

1969年4月1日（火）7時
東京文化会館大ホール



芥川也寸志

Yasusi Akutagawa

1956年，はじめて足跡をしるして以来，訪ソ旅行は十数回におよび，自分でも思い出せないくらい。ことに近年，日ソ青年友情委員会の日本側会長になってから，両国の相互理解のため日夜奔走している。一昨年，新響が訪ソ演奏旅行という偉業をなしとげられたのも，彼の存在なくして考えることはできまい。

こういった関係で，ソヴィエトの音楽家とのつきあいは広く，かつ深い。ショスタコーヴィッチ，ハチャトリアン，カバレフスキー，……etc. 今夜は，かねてからの念願であったソ連現代曲のタクトをとることになり，内心満足のようだ。

昭和24年，東京音楽学校研究科作曲部を卒業，作品は，＜交響三章＞など多数。文豪龍之介の3男，44歳。

★ショスタコーヴィッチは規則正しい端正なリズムを非常に好む作曲家です。彼は，同型のリズムを，しつこく何回も何回も繰り返し，強調することによって，強い効果を上げるのが上手です。彼が第二次大戦のさなかに書き上げた第7交響曲の第1楽章には330小節にわたって，小太鼓が2小節単位の同形のリズムを，繰り返して叩くところがあります。330小節！　もし一度でもこの交響曲をお聴きになった方は，この強い印象を忘れることができないでしょう。

第7交響曲に現われるマーチ風のリズムの反覆は，ショスタコーヴィッチの場合，一つの大きな技法上の特徴となっていて，たいていどの作品にも1回は顔を出します。（芥川也寸志）

——「私の音楽談義」（音楽の友社）から——



岡村梨影

Rie Okamura

下関市生れ，原智恵子に師事。

1954年秋，フランス政府給費留学生としてパリーに留学。ラザール・レヴィに師事，1958年パリー音楽院ピアノ科を1位で卒業，同じく室内楽を1位で卒業。

1959年秋，ベルリンに留学，ホッホシューレにてヘルムート・ロロフに師事。

その間，ドイツ，ユーゴスラヴィア，スイスなどで演奏の他，1960年ヴィオッティ国際コンクールで金賞授賞。

1963年帰国後，東京，大阪で数度リサイタルを開催するほか，N響，日フィル，読響，東フィル，東響と数多く協演。

1966年1月再渡欧して，さらにその才能をみがき，1967年8月帰国。帰国リサイタルのほか，日フィル定期公演に出演した。

曲目解説

河　野　土　洋

藪から棒ですが，そもそも演奏会のプログラムを組むということは意外に難しいもので，今晩のメニューにしたってその経緯はいろいろでした。大体のところはこうです。なんとかショスタコーヴィッチを手がけてみたいという話が出ると，コンチェルトもひとつ，という声もあがり，それじゃオードブルには清涼バロック音楽を，ということになって，長い長い思案のすえ，クリスチャン・バッハの手になる「シンフォニア」に決りました。

さて，これからが大変です。ビフテキとキャベツみたいに，まるで違う趣きの曲の練習にとりかかるわけです。でも，かえって面白いということも言えます。ところで，もっと大変なことは，これから，この曲目の解説をしようと言うことです。なにしろ，ずいぶん古い話から，これまた，ずいぶん新しい話まで知っていないと，曲の解説なんてできっこありません。クリスちゃん・バッハというのは 17 世紀後半，日本でいえば，徳川四代将軍，家綱の昔。片や，ショスタコーヴィッチは，ただいま活躍中の御大。ですからいろんな参考書と首引きで話を進めなければなりません。まあなんとか，わが**体験的曲目解説**（怪説？）を試みることにいたしましょう。

「シンフォニア」変ロ長調　　J. C. バッハ

遺伝学の本をひもとけば，必ずその系図が出てくると言うのがバッハ1族です。そのなかのボスは，なんといっても，ヨハン・セバスチャン・バッハでしょう。その伯父さんにあたるのが，ヨハン・クリスチャン・バッハ（Johan Christian Bach, 1642～1703）であります。でも，このクリスチャン伯父さんのことは，あまりよく知りませんので，とにかく「シンフォニア」を聞いてください。

曲は3楽章からなっており，第一楽章は，速い2分の2拍子。実に快適な変ロ長調の主和音に始まります。むかしむかしの感じがする中に，まるで急行列車に乗って野山を駈け抜けているかのような感じがします。でも，やはりあまり速くない急行列車のようです。

あっという間に終ると，次は第2楽章。ゆっくりした四分の三拍子で，みんなが，期待と不安をもって見守る中，オーボエのソロが聞きものです。

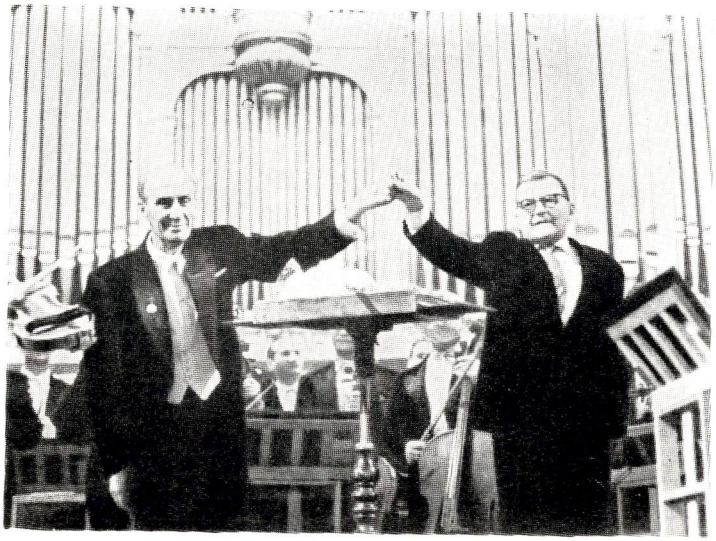
第3楽章はまた，調子のよい八分の三拍子。「おもちゃの交響曲」を思い出す人もありましょう。繰り返し記号がいっぱいあり，これをまちがいなく弾くのに神経を使います。

楽器の編成は，フルート2，オーボエ2，クラリネット2，ファゴット2，ホルン2，弦楽5部となっていて，トランペット，ティンパニは使われていません。

ピアノ協奏曲　第1番　ハ長調　ベートーヴェン

ドードド｜ド・・・｜ドレミファ｜ミレ・・

考えてみれば，なんとまあ面白くもないテーマでありましょうか。それも，ハ長調の……。でも，この飾り気のない，ぶっきらぼうが正にベートーヴェンを象徴していると言えるでしょう。ベートーヴェン（Ludwig van Beethoven, 1770～1827）という人がどんな人物だったかというと，いろいろな伝記や解説書がありますからそれを読むとわかります。でも，もっとよく理解する方法はベートーヴェンの作品を演奏したり，鑑賞したりするのが一番のようです。3年ほどまえ，新響は，ベートーヴェン・チクルスをやりました。このときが，私のベートーヴェン開眼のワン・ステップとなりました。なにしろ，一年中，ベートーヴェンの交響曲や序曲ばかり練習



◇

ショスタコーヴィッチ（右）とレニングラード・フィルハーモニー・オーケストラの常任指揮者ムラヴィンスキー（左）。

ショスタコーヴィッチの交響曲は，ムラヴィンスキー，レニングラード・フィルの組合せで初演されることが多い。

◇

していたのですから……。

それはさておいて，このピアノ協奏曲第1番 作品15は，まだベートーヴェンの若かりし30歳当時の作品で，ハ長調の第1交響曲を発表したり，また作曲家として，ピアニストとして，しだいに名声が高くなってきたころです。本当は，このハ長調の曲の前に，変ロ長調のピアノ協奏曲を書いているのですが，番号が入れかわっています。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ　第1テーマはさきほどの「ドードドド……」。草稿には，冒頭に一度書いた*f*をペンで消して*p*に直しています。この気持，わかる気がいたします。第2テーマは，モーツァルトを思い出すような軽快な音楽です。

第2楽章 ラルゴ　ゆっくりとした変イ長調の旋律。平和で，のどかな，春の午後を思わせます。

第3楽章 ロンド・アレグロ　童謡の「むすんで，ひらいて」のレコードを，回転を速くして，始めのところを何度も繰り返して聞いているような主題です。このテーマは，ロンドですから，なんべんも顔を出します。

中ほどに，イ短調のリズミックな部分があり，また，「むすんで，ひらいて」が違った調で出てきたりして，カデンツァがすむと，ピアノとオーケストラのかけ合いが華麗な宴を繰りひろげます。最後に，オーボエのていねいな挨拶があって，おひらきとなります。

交響曲第5番　ショスタコーヴィッチ

「ロシアのモーツァルト」といわれ，早くから天才ぶりを発揮したディミトリー・ショスタコーヴィッチ（Dimitri Shostakovich）は1906年9月25日，ペテルスブルグ（いまのレニングラード）に生れ，1919年には，ペテルスブルグの音楽院に入学。ピアノをニコラエフ，作曲をスタインスベルグという先生について勉強しました。1925年，ここを卒業して，作曲生活にはいりました。初めのうちは，ソヴィエトの宣伝音楽を書いているなどと言われたりしましたが，しだいに国民主義的なものとなっていきました。曲想はグラズノフやストラヴィンスキーの影響も見えますが，大衆的な感覚と，明るい輝いた響きをもって奇想に走るということもなく，よくまとまったものであります。

交響曲は19歳のころから作りはじめ，全部で11曲あります。そして，ベートーヴェンのように，奇数番，すなわち，第1，第3「メイ・ディ」，第5，第7，第9が傑作とされています。

一昨年，新響は，ソ連への演奏旅行をいたしました。レニングラードで，近年の変遷を描いた記録映画を見る機会にめぐまれましたが，そのなかで，戦禍のもと，ショスタコーヴィッチがピアノに向かって，第7交響曲を作曲している場面がありました。「戦争と音楽」……複雑な思持ちでこれを見たのを覚えています。

今宵演奏いたします第5番のシンフォニーは，なかでも特に有名で，ある国では，ラジオのニュースのテーマ音楽に，この第4楽章の冒頭を使っているという，めずらしい話もあります。

曲は四つの楽章からなり，全楽章をとおして，真にユ

◇

1967年10月4日，新響はソ連演奏旅行の途中，レニングラード・フィルの招待を受け，その定期演奏会を聴くことができた。曲目はショスタコーヴィッチの交響曲第5，第6番で，写真はそのときのプログラム。

左上に，当夜の指揮者ムラヴィンスキーのサインがみえる。

◇



Среда, 4 октября 1967 года

ДИРИЖЕР

народный артист СССР,
лауреат Ленинской и Государственной премий

ЕВГЕНИЙ АЛЕКСАНДРОВИЧ
МРАВИНСКИЙ

ПРОГРАММА

Д. Д. ШОСТАКОВИЧ
(род. в 1906 г.)

I ОТДЕЛЕНИЕ

ШЕСТАЯ СИМФОНИЯ си минор, соч. 53 (1939)

1. Largo
2. Allegro
3. Presto

II ОТДЕЛЕНИЕ

ПЯТАЯ СИМФОНИЯ ре минор, соч. 47 (1937)

1. Moderato
2. Allegretto
3. Largo
4. Allegro non troppo

ニークな，色彩に満ちた旋律・和音が鳴り響く雄大な曲です。

第1楽章　モデラート　　いきなり，低音弦が*f*で，ダダー。すると，ヴァイオリンがこれを真似てジジー。ダダー，ジジー……。これは，一度聞いたら忘れられない，実に特徴ある出だしです。ひとしきり，気を許せないときが過ぎると，弦楽器群のえらく調子の良い，リズム伴奏が始まります。それに連れて，第1ヴァイオリンが，歌うに歌えない，素敵で奇妙な歌を歌います。これが第2テーマで，やがて，これをヴィオラが真似，同じ歌を歌いますが，これがまた，泣かせます。そして，交響曲にはめずらしく，ピアノが出てきたりして本格的に騒々しくなってくると，小だいこがリズムを打ち，ラッパがおどけて鳴り響きます。

冒頭のテーマを弦楽器と木管族が，かけ合いで，一生懸命競奏しているうちに，金管が朗々と第2テーマを吹き鳴らします。とてもいいところだけど，演奏するとなると一番むずかしく，大変なところです。

ふたたび静かな第2テーマ。弦の伴奏のうえ，こんどはフルートとホルンのデュエットです。つい，うっとりと聞きほれてしまう，私の大好きなところです。すっかり静まってから，チェレスタの鳴らす半音階の上昇音とともに，消えるがごとく終わります。

第2楽章　アレグレット，四分の三拍子　　低弦の踊りに始まり，この奇妙な踊りが，木管やヴァイオリンにまで伝染して，みんな交替で踊り狂います。

中間部，ヴァイオリンのソロがおもしろおかしく，また，いかにも楽しそうに歌ってみせます。ふたたび，みんなが踊り続けていると，オーボエが「もう，よそうよ」といいだします。みんなも疲れてきたので，とうとう尻餅をついて，おしまいになります。

第3楽章　ラルゴ　　ヴァイオリンが3部，ビオラが2部，チェロが2部にそれぞれわかれ，ムードミュージックを奏でます。とはいっても，どこにでもあるというしろものではありません。じわじわと心にしみるストリングス，ハープの伴奏でフルートが歌う淋しげな歌。そうかと思うと，首をしめられるような錯覚に陥いるところ。そして最後は，ハープのハーモニックスとともに，また，消えるように終ります。

第4楽章　アレグロ・ノン・トロッポ　　居眠りをしていた人は，たたき起こされます。たいこの連打に誘われてトロンボーン族のお出まし。続いて，全オーケストラが鳴りわたり，息つくひまもなく，目も回わる速さで先へ先へと進んでいきます。

やがて，弦楽器が木管とユニゾンで広大無比な旋律を奏したのち，静まる間もなく，ヴァイオリンの悲痛なメロディーが心をふるわせ，無気味なティンパニーのリズム打ちとともに，初めのテーマがそっと現われ，しだいに増大して，絢爛豪華な大フィナーレとなります。

たいこが鳴り，トランペットが叫び，弦楽器が悲鳴をあげ，正に大編成オーケストラの醍醐味をフルに満喫できる圧巻といえましょう。

（新響――コンサート・マスター）



新交響楽協会　新　交　響　楽　団

▷労音アンサンブル時代（1955年）

1955年２月，東京労音会員の音楽愛好者，約40名によって，新響の前身“労音アンサンブル”はスタートした。編成はバラバラながらも，この楽団は労音会員に歓迎され，各地の文化祭などに出演するようになった。ところで，この年の11月，芥川氏が練習場へ姿を現わした。氏と新響とのつながりは，ここにスタートする。

1956年１月，小編成のアンサンブルから本格的なシンフォニーオーケストラへ脱皮することを計画，名称を“新交響楽団”と改めた。そして，その後，しばらくの間，演奏活動は中止し，芥川氏のきびしいトレーニングを受けることになった。

第１回定期――1957年11月21日，日本青年館にて。「運命」ほか。

第２回定期――1958年11月12日，日本青年館で。モーツァルトの交響曲41番ほか。1959年，はじめて会津若松へ演奏旅行に出かけている。

▷労音例会出演，第２オーケストラの誕生など

1960年から地方労音の出演依頼に応ずることとなり，上田，熊谷の両労音へ出かけた。

ところで，第２回定期の前後から，メンバーの人員，技術レベルなどに差がめだつようになり，オーケストラを二つに分ける案が芥川氏から提案された。結局，１年がかりで実現することになるが，これは同様な波及効果となって現われ，第３オーケストラの誕生，ブラスオーケストラの編成などへと発展する。

東京労音に出演――1962年４月。

第９交響曲演奏――1963年12月，東京労音例会で第９を５回演奏。

北海道演奏旅行――1964年４月。

四国演奏旅行――1965年４月。

▷新交響楽協会設立，労音から分離

新響はそのときまで東京労音のバックアップで運営されてきたが，労音側と意見が対立。ついに，1966年３月，新交響楽協会を設立して，自主独立の道を歩むことになった。

その後，1966年9～12月にわたる，ベートーヴェン交響曲全曲の連続演奏会を行ない，1967年９月～10月にかけて実施したソ連演奏旅行というアマチュアオーケストラとしては前代未聞の壮挙をなしとげた。

1968年は，比較的，地味な活動ではあったが，東響との合同演奏会，初の客演指揮者――近衛秀麿氏をむかえてのモーツァルト特集演奏会をひらくなど，着実に発展し，実力をたくわえた。

1969年は，すでに港区教育委員会など２回の依頼演奏会に出演した他東響と合同で第９の第４楽章をTBSで録画している。また，２回の定期演奏会，サマーコンサートのほか，10，11月には九州，沖縄への演奏旅行が予定されている。

社会人，学生からなるユニークなこのシンフォニーオーケストラは，過去の実績を土台にし，未知の分野に挑もうとしているのだ。

ショスタコーヴィッチの笑い

芥川也寸志

「いまでも，よくフットボールにいらっしゃるんですか？」

「しょっちゅうゆきます。あれは私の健康のために——肉体的にも精神的にも必要なものですから……」

ぼくたちの会話はこんなふうにして始まったのだが，実はこれがクセモノだった。いま，眼の前にいる彼が，多少荒くれたこのスポーツに夢中になり，ジャッジの資格さえもっているという有名な話は，ほとんどぼくには信じられなかった。

絶えず何かにおびやかされているように，眼玉をせわしなくきょろつかせている，見るからに気の弱い神経質そうなこの男。ポケットからタバコをとり出す。けいれんするような手つきでさぐりあてた1本を口にくわえるとあわただしくマッチ箱をさがす。あっちのポケット，こっちのポケット……。その動作はまことにせせこましく，フットボールの選手が機敏にグラウンドを走りまわるさまにやや似ていないこともないが，その他のあらゆる点でこの二つのものはくっつかない。



筆者（左から2人目）とショスタコーヴィッチ（左から3人目）。1956年モスクワにて。

彼に会ったのは 1956 年の6月。かつては青年作曲家としてその名をはせたショスタコーヴィッチもだいぶんふけこんでしまった。少し八の字にたれ下ったショボショボしたまゆげが，それを一番強く感じさせる。うすいくちびるからパラパラ豆鉄砲のように早いロシア語がとび出してくるたんびに，まぶたとほほの筋肉が微妙なけいれんを起して，彼独特の表情を作り出す。

たしかに，彼はフットボールが好きでたまらないらしく，この話が続いている間，うすいくちびるをななめにまげて薄笑いを続けていた。仮面の笑い——不思議な笑い方である。笑いにフィルターがかかっている。

フットボールの話はまだよかった。話題が音楽に移るとぼくはすっかり困惑してしまった。話が一向にのってこない。まるで2人の人間がいるようで，どちらに焦点をあわせていいのかわからない。そのうちに，ぼくの相手になっているのは二つの仮面で，本物はどこか別のところにいるような錯覚さえ起しそうになった。ぎごちない会話が続いた。

「いまのお仕事は？」

「新しい 11 番目の交響曲を，できれば夏までに書き上げます。これは 1905 年の革命のうたが主題になっています。この頃はどうも身体が疲れて仕方がありません。だから，仕事は朝から5，6時間しかしません。朝はものを考えるのに一番よいように思います」

「随分早くから仕事をなさるわけですね？」

「大抵6時からはじめます。午後は作曲以外の仕事のために，夜はよく演奏会にゆきます」

「貴方は筆が早いので有名ですが……」

「調子によりますが，いい時は新しいスコアを 20 ページから 30 ページぐらい書きます」

「ピアノはお使いになりますか？」

「ほとんど使いません。その方が音楽を深く考えられるような気がします」

彼の表情はまるでスポークスマンのそれで，とても自分のことをしゃべっている人の顔とは思えない。そして時々例のフィルター・カットの笑いが浮んでは消える。

相変らずぎごちない会話が続く。彼と会った場所は，

VOKS（対外文化局，この建物はもとの日本大使館）の1室だったが，隅の方に古びたグランド・ピアノがあって，たまたまスコアの誤植の話が出た時，自分でいくつかの曲を弾いて聴かせてくれたりした。この頃は前よりもピアノがうまくなったような気がする……だから「24の前奏曲」の録音をやり直したい……ともいった。それから，ぼくの方から日本にきて欲しいこと，そしてそれに関するいろいろな相談をもちかけた。

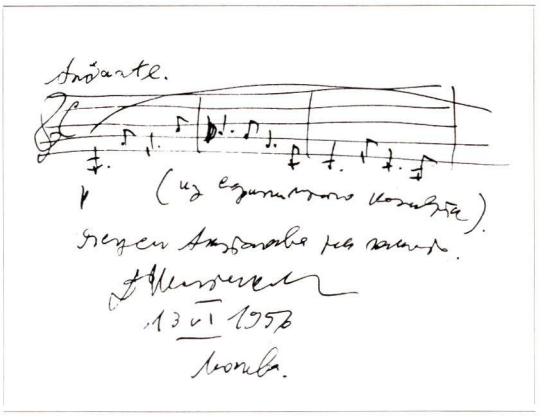
こんなやりとりをしている間に，ぼくは少しずつクセモノの正体がわかってきたような気がした。彼の話しっぷりは相変らずいたって落着きのないものだったが，そのくせどこか底抜けに無邪気で，くったくのない朗らかさに満ちていることに気がついた。たぶん，カギはあの不思議な笑い，フィルターの笑いである。フットボールが好きでたまらない，といった時の子供のような無邪気さと，冷たいスポークスマンのような表情を作り出す，およそロシア人らしくない神経質な用心深さとが，交叉するところにあの薄笑いが生れるらしい。目から受ける印象と，耳からはいってくる印象とが，あの笑いの瞬間にふっとすれちがう。

恐らく彼は猛烈なお人好しで，少年のような天真爛漫な精神の持主に違いない。だから，少し無遠慮に批判*の問題を切りだした時も

「われわれの間の批判は同志的なものですから，もし批判を恐れる人がいたら，それは臆病というより他ないでしょう。（そして例の笑いを浮べながらフットボールと同じ調子でしゃべりだす。）重苦しい音楽ばかり出来たら聴く方はやりきれないでしょう。楽しい音楽もたくさん必要ですよ。私の音楽についていろんなことをいう人がいますけれども，これからも私は軽い面白い音楽をたくさん書こうと思っていますよ」

という。そう思って見ればこの時の彼の表情は，まさにこの作曲家の中で演じられたに違いないドラマがいきいきと浮び上っていたという点で，まことに美事であった。恐らく愉快な音楽を深刻な表情で，深刻な幾ページかを笑いながら書いたに違いないこの逆説的な作曲家の面目躍如たるものがあったといっていい。

〔ショスタコーヴィッチ自筆，「交響曲第11番」のスケッチ。作曲者から筆者に贈られた。〕



ぼくたちの会話は，すっかりぎごちなさがなくなっていた。にもかかわらず，妙にそれから後のやりとりははっきりと憶えていない。彼の家庭の話，日本の音楽界の話，「ヴァイオリン協奏曲」や「森の歌」の話，作曲家同盟大会の話，数日前に一緒に聴いた音楽会の裏話など——。

「好きな外国作品は？」

いとも簡単に「レスピーギのローマの泉。それからミヨーのフランス組曲。それから…ブリッテンの作品。それから…ボギーとベス，ガーシュウイン。それから…」

そこへ写真屋がはいってきた。ショスタコーヴィッチに何か話している恰好をしろという。パピロスにあわただしく火をつけて，それから口の中で何かムニャムニャいい出した。よくきいていると

「16，17，16，17，16，17」

といっていた。例の笑いを浮べながら——。

——「私の音楽談義」（音楽の友社）から——

＊1947，8年，ショスタコーヴィッチはじめ，ソ連作曲界第一線の人達が誤った方向に進んでいるとして共産党中央委員会から批判された。いわゆる，ジュダーノフ批判である。

新響の団員を募集しています

メンバー表を見てもわかるとおり，新響団員は，サラリーマン，学生，主婦などて構成され，音楽を職業としている者はおりません。

どなたでも，簡単なテストを受けて団員になることができます。

問合せ先　千代田区神田駿河台３の６　全電通会館（日音協気付）

新交響楽協会　　TEL（253）９８３１

＜連載・戦後オーケストラ小史＞　Ⅵ　（最終回）

馬　場　　健

東京交響楽団の解散

前回，商業放送という新しいマス・メディアの要請から成立した≪日本フィルハーモニー交響楽団≫について書いた。≪日本フィル≫の成長が，一応順調であったのは，その成立自体が，そもそも≪文化放送≫という企業体を背景としていただけに，経済上の問題がさほど前面に大きく出てこなかったからであろう。このことは，後に設立された≪読売日本交響楽団≫（昭和37年設立・後述）にもあてはまる。けれども，オーケストラと商業放送とのつながりは，必ずしもいつも理想的な形態をとったわけではない。その最も悲劇的な例が，≪東京交響楽団≫であった。

すでに書いたように≪東響≫は，昭和21年に≪東宝交響楽団≫として発足して以来，≪日響-N響≫につぐ第2のオーケストラとして，特色ある活動を続け，とくに外国および日本の現代作品を積極的に紹介して，高い評価を受けていた。しかしNHKという強力な後楯をもつN響にくらべて，東宝株式会社の傘下を離れた≪東響≫の経済的基盤は，あまりに弱体であった。しかも，当時≪東京フィル≫が，NHKとの間にかなりの数の放送契約を結んでおり，≪東響≫のはいり込むすきはほとんどなかった。その≪東響≫にとって，商業放送のもつ経済力と電波による伝播力とは，大きな魅力だったに相違ない。また一方，全国に数多く新設された商業放送の側でも，自からオーケストラを設立するつもりはなくとも，なんらかの形で，既存のオーケストラと結びつく必要があった。

その結果，商業放送開始の昭和26年には，早くも≪東響≫は，新日本放送（現・毎日放送）の≪青少年シンフォニー・コンサート≫，ラジオ東京（現・TBS）の≪コンサート・ホール≫に連続出演し，さらにRKB毎日放送，中部日本放送，東北放送とも契約を結んだ。そして昭和31年5月1日には，機構も財団法人に改め，秋にはラジオ東京との提携を一層強化して，秋季からの定期公演を共同主催とした。そうしたことから，昭和34年には大久保に新練習所を建設するなど，経営は好転した。その好調のうちに，その年の9月28日には，ヘルムート・ロロフを独奏者に迎え，上田仁の指揮で，石井歓のシンフォニカ≪アイヌ≫，ベルリオーズの≪幻想交響曲≫，ベートーヴェンの第5ピアノ協奏曲≪皇帝≫によって，華々しく第100回定期公演を祝った。この時期が，いわば，≪東響≫の一つのピークであったと考えられよう。昭和35年には，TBSテレビに≪東響≫アワーが設けられ，翌昭和36年には，TBSから八木一平が事務局長・常務理事として出向した。このころ，TBSが，≪東響≫の経営にとっていかに大きな存在であったかは，昭和36年度の決算総額約1億2,800万円のうち，実にTBSとの専属契約料が約半分の5,200万円にものぼっていたことからも明らかである。同じ36年には，東芝音楽工業との間に，レコード専属契約が成立し，37年にはそれがさらに強化されて，≪東芝シンフォニー・コンサート≫，TBSテレビに≪東芝ホーム・コンサート≫などが発足した。しかし，当時，経済界を襲った不況によって，東芝音楽工業を始め，各商業放送も，しだいに財政を引締め，その年のうちに，東芝と提携した上記のコンサートおよびテレビ放送が中止され，MBSやRKB毎日放送との契約も解除された。昭和38年3月は，理事長だったアサヒ・ビールの山本為三郎が辞任し，後任を得られぬまま橋本鑾三郎楽団長が，理事長代理となり，9月には17年間，常任指揮者をつとめた上田仁が辞任，斎藤秀雄門下の俊英，秋山和慶と共に専属指揮者となった。

経済的苦況はさらに深まり，昭和38年9月には東芝音楽工業との専属契約が解除され，11月にはTBSから翌年3月までの契約料の前払を受けて急場をしのいだ。東芝との契約解除による減収は，年額1,800万円にのぼった。さらにその頼みのTBSも，12月には専属契約を解除し出演契約料だけとした。その間，NHKとのテレビ出演契約をとりつけるなど，いくつかの手が打たれたが焼石に水であった。翌昭和39年春には，TBSから，10月までの出演契約料の先払いを受けたが，急場をしのぐことができず，3月20日の常務理事会は，解散を決意し，3月23日，事務局および楽員に解散を発表，3月分給与および退職金の支払い不能を宣告した。正式の解散は3月26日の理事総会で決定され，翌27日にその手続きがとられたが，解散に際して残された負債総額は，約7千数百万円にのぼった。その内訳は，TBSに約5,000万円，朝日ビール1,800万円，税金未納額500万円，一般

債務500万円，定期会員の会費支払い200万円であった。

それに対して，楽員は，楽員総会を開いて対策を協議し，大半の楽員の希望によって，楽員の自主運営によるオーケストラを新発足させることを決め，楽員75名（事務職員2名を含む）による，有限会社≪東京交響楽団≫（代表・中山嘉典）の認可申請を3月30日に行ない，翌31日に認可された。そうした，あわただしい動きのさなか，3月27日の朝以来，消息を絶っていた楽団長，橋本鑒三郎の水死体が，4月9日の早朝，小松川で発見され，死後約2週間と推定され，東響の封筒にはいった走り書の遺書＜死んでおわび……＞から，自殺と断定された。

この18年の歴史を誇った≪東響≫の解散と楽団長の死，そして楽員による新≪東響≫の発足という動きは，表面的には，ほぼ3週間にすぎないが，その根は深く，また≪東響≫が解散へと追い込まれていった経緯は，これまで述べてきたように，数年間にわたっているのである。この事件は，ひとり≪東響≫の問題，あるいは1人責任をとって死を選んだ，橋本楽団長の問題にとどまらず，日本のオーケストラ界，ひいては，日本の音楽界の経済的貧困と底の浅さをみせたものとして，注目に値する。この事件当時も，多くの識者によって，さまざまな原因の究明や，今後の問題が語られたけれども，それから5年を経た今日，当時指摘された問題のいくつが解決されているだろうか。

楽団自体の経営のずさんさや楽員の自覚の乏しさといったことも，大きな問題ではあろうが，莫大な経費を要するオーケストラの経営が，商業放送という異なった企業体に依存せざるを得ないという点が最も大きな問題ではなかったか。そして企業である以上は，商業放送も，低い視聴率，それにひきかえ，必要経費の莫大さから，契約を打ち切らざるを得なかった事情はわかるにしても，放送という＜文化事業＞の一環を自認する企業としての＜文化的責任＞は追求されるべきだろう。

また，多くのオーケストラの楽員の間にしばしばみられる＜雇われ意識＞，つまり経済的な問題は，自分には一切かかわりなく，少しでも高い給与さえもらえればよいという意識もまた問題にされてよいだろう。

当時，新聞での発言で芥川也寸志の＜……われわれ音楽家は，われわれがお互いにどう手を握りあい，どう生きてゆくかを，まず考えるべきだ。本当の音楽は金では買えないのだ。また売り物にもできないのだ。われわれが，それで生きるよりほかない音楽とは，もっと大事なものではないか。＞（昭和39年4月8日付毎日新聞夕刊）という意見は，現在でもそのまま通用するだろう。

楽員によって新発足した≪東京交響楽団≫は，翌昭和40年3月には，秋山和慶を常任指揮者として定期公演を再開し，立ち直りをみせた。

また，≪東響≫の17年間にわたる常任指揮者上田仁は親友・橋本楽団長の死にあたって，＜20数年来の親友で戦後，力を合わせて交響楽運動をすすめてきたのに，東響は解散し，いままた友だちも失った。いつも楽団の側に立って腐心していたのに，結果は逆の形になり，心を痛めていたようだ。片腕を失なったような思いだ。＞（昭和39年4月10日付朝日新聞）と語っていたが，その後はほとんど指揮台に立たず，2年後の昭和41年12月26日，病死したことを付記しておく。（筆者：音楽評論家）

新響・次回演奏会予告

新響・サマーコンサート——ポピュラー音楽の夕べ

日　時　1969年8月4日（月）　午後7時
会　場　東京文化会館大ホール
曲　目　第1部　クラシック名曲集
1）バレー組曲・眠りの森の美女……チャイコフスキー
2）ウィーンの森の物語……J. シュトラウス
3）ミシシッピー組曲……グローフェ
第2部　ミュージカル名曲集
1）南太平洋……R. ロジャース
2）マイ・フェア・レディ……ローウェ
3）カンカン……コール・ポーター
演　奏　新交響楽団
指　揮　芥川也寸志

パートから (No. 8) フルート

フルートの歴史なんてシカツメらしいことは省略しよう。ただ，大昔からあった楽器であることは間違いない。わが国の横笛だって，フルートの一種である。

ただ，昔のフルートは構造が不備で，音量も少なく音程も悪かった。これを根本的に改良したのが，テオバルド・ベーム（1794～1881年）。彼が物理的な計算で設計した新しいフルートは従来のものと比べ格段に性能が上昇した。このベームのシステムは，オーボエ，クラリネットなどにも応用されることになった。

◆フルートのための作品

なにしろ歴史の古い楽器だから，フルートの曲は数えきれないほどある。ただ，一般的にいえることは，作品は，バロック時代など古い時代と，近代・現代に集中されており，クラシック，ロマン派の作曲者の手になるものは少ないようだ。古い方では，バッハ，テレマン，ヴィバルディ，……と枚挙にいとまがない方だし，最近の曲では，プロコフィエフのソナタをはじめ，イベールの協奏曲を中心とした，多くのフランス系作曲者の作品をあげることができる。なぜ，このように両端に片よっているのだろうか。これは，やはり楽器の性能に起因しているのだろうと考えられる。すなわち，さきにも述べたように，昔のフルートは音量も少なく，かつ音程もバラバラであった。事実，モーツァルトがフルートを嫌ったという話は有名である。しかし，古い時代では室内で演奏することが主だったと思われるし，また，一応の腕を持った人なら，音程の不揃いも気にならなかった。したがって，この時代にまず前期の全盛を謳歌したものと考えられる。

当時，弦楽器はすでに完成しており，改良の余地はなくなっていたが，管楽器はまだまだ不完全であった。トランペットなどの金管楽器はバルブがなく，したがって，音階も自由に吹けないものが使われていたのである。

そういった事情もあってか，ベートーヴェンなどはあまりフルートの曲を書いていない。ベームの改良がもう30年ほど早かったら，様子は相当変わっていただろう。

◆オーケストラとフルート

オーケストラにフルートをはじめて採用したのはリュリ（1632～1678）だといわれているが，常用されるようになったのは，ハイドンからである。モーツァルトは先にも触れたようにフルートが嫌いだったせいか，この楽器のはいってない交響曲も作っているが，だいたい1本は入れている。

管弦楽におけるソロの有名なものとしては，ビゼーの「アルルの女」中にある“メヌエット”，メンデルスゾーン「最夏の夜の夢」の“スケルツオ”，ドビュッシー「牧神の午後」冒頭のテーマなど数え切れないほどある。概してフランス系作曲家がフルートをうまく使っているようだ。チャイコフスキーは，自身がフルートを吹いたせいか，彼の作品にはいたるところに聴かせどころをいれている。しかも，それらはいずれも相当むずかしい。

新しい作品のなかでも，フルートは重要な位置をしめている。フルートの兄弟分であるピッコロ（フルートの1オクターブ上の音を出す）は以前から使われていたが，最近はフルートより4度下の音を出すアルトフルートもしばしばオーケストラの仲間入りをするようになり，新響でも昨年12月，小フーガ，ト短調（バッハ-ストコフスキー）を演奏したとき初登場した。

◆フルートのテクニック

フルートは，リードを持たない唯一の木管楽器である。吹き方はよくご存知とは思うが，やや斜め横にかまえ，マウスピースの穴から息を吹きこんで空気の渦を作り，音を出す。フルートの管にはCを最低音とした12の主なトーンホールがあり，指の操作で半音ずつの上昇・下降調節をする。フルートは，スケール，アルペジオ，スラー奏法，スタッカート奏法，いずれも自由にできる。スタッカートで音を奏する場合，ダブルタンギングを用いれば相当早いパッセージでも容易に吹奏できる。また，木管楽器でハーモニックスの出せるのは，フルートだけである。

フルートの音域は，図のとおり，3オクターブであるが，近代の曲ではもっと上の音を要求することが多い。現にショスタコーヴィッチの第5交響曲では，C♯が譜面に書かれている。また，その上のDを出した方が合理的な部分もあるので，そういったところはDを出すことにしている。一昨年，モクワ音楽院でそこのフルートの先生からプレゼントされた譜面には，もう一つ上のEの音が書かれていた。このEはどうにか出るが，聞くところによると，アメリカにはF，Gを出す猛者がいるという。私など，いろいろ指つかいを工夫し，ウンと気ばって吹いてみてもE以上はとても出ない。もっとも，E以上の音を書きこむ作曲家は当分現われないだろう，と安心はしているのだが……。

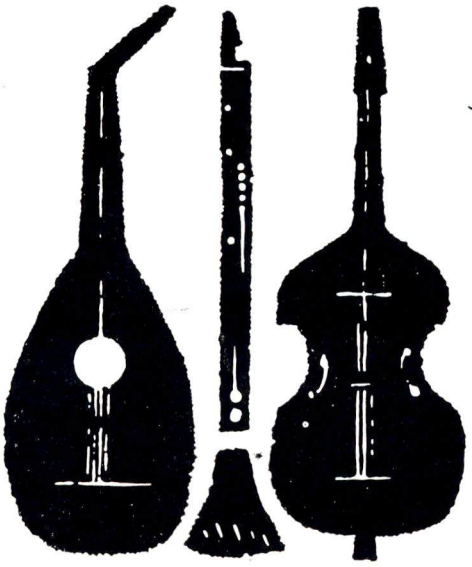


◆余　談

最近，フルート・ブームなんだそうである。“高名”な先生はレッスンのため飛行機を駆って日本中をまわっているという。しかし，見たところ余り長く続ける人は，そうたくさんいないようだ。ちょっとした曲が吹けるようになったところで，練習を止めてしまうような人が多い。どんな楽器でもそうだが，とにかく根気よく続けるのが上達のコツといえる。フルートは，習いはじめ，割りに音が出やすいため，みくびってしまう人もいるようだ。しかし，一応の水準に到達するにはいくつもの壁がある。それを乗り越えてこそ，音楽する楽しみの境地にはいりこめるのだ。

もっとも，あんまりフルートに夢中になって，いわゆる“フエキチ”になってしまうのは考えものかも知れない。現に新響のフルート奏者にその徴候があるようだ。そのせいかどうかは知らぬが，新響フルートパートの平均年齢は，新響中，最高なのである。　　（松永　昇　記）

弦楽器
管楽器
専門



ヤマハ
ピアノ、オルガン（二階展示）

Shimokura's musical instrument

株式会社 下倉楽器

東京都千代田区神田駿河台2-2 Tel東京(291)4022・4032

お茶の水駅前

世界最高級



ピアノ	STEINWAY & SONS BÖSENDORFER
ハープ	LYON-HEALY
チェンバロ	NEUPERT
マリンバ ビブラホン	MUSSER-MARIMBA
チェレスタ	MUSTEL
バスーン	HECKEL
フルート ピッコロ	RUDALL-CARTE
パイプオルガン	W. BOSCH

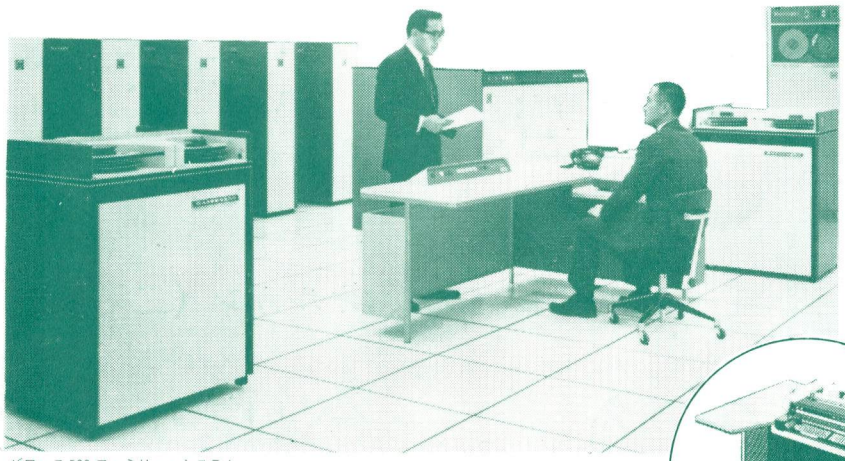


日本総代理店

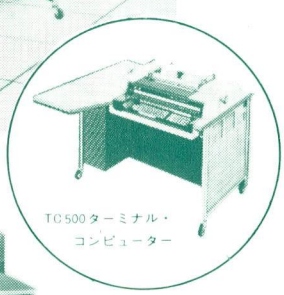
すべての楽器 直輸入 株式会社 松尾楽器商会

東京都港区六本木4丁目1番11号（584）5251(代)

システムを創造する 高千穂交易



バロース 500 ファミリー・システム



TC500ターミナル・コンピューター

最高のシステムが選べる バロース1000機種



E 6000ビジブル・レコード・コンピューティング・システム



E4000ダイレクト・コンピューター・システム



J800自動乗算加算機

加算機からコンピューターまで、1000機種におよぶバロースの製品は、企業規模・目的に応じて自由にえらびいただけます。日常管理からMISの確立へ……どの企業のどんな要求にもこたえられる優秀な製品が、経営の個性を重んじた効率的なシステム創りを可能にしているのです。経営の目的にピッタリのシステムをあなたの企業と一体になって研究する技術の商社 高千穂交易。情報化社会をむかえて、経営システムの整備が急がれるいま、あらゆるマネジメント・ツールを通じて、創造的経営をめざすあなたの企業を強力にバックアップします。

Burroughs

電子計算機／会計機／加算機
ビジネス・フォーム／電子部品
アンコール・カーボン

高千穂交易

大阪本社 大阪市北区小松原町27・富国生命ビル・313
3381 東京支社 東京都千代田区神田1の7・半蔵門ビル
263 3211 サービス・ステーション 全国70カ所

●資料のご請求は 各店営業部または東京支社・宣伝課へ お申し込みください